

「ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされているのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った(マルコ 2:16)」。

ケガレている者と食事するとそのケガレが伝染する、という信仰による非難。罪人や徴税人と共にめし食うとは、弟子を教えるラビにはありえないが、その食事風景を想像すると、にぎやかな笑い声まで聞こえて来る。

ウィルス感染を防ぐに「三密」が必要だと分っていても、貧しい暮らしの三密回避は難しい。罹患率や死亡統計はスシ詰め生活の貧者が圧倒的だ。感染者多いブラジルの巨大スラムをTVで観たが、コロナ恐怖が波状的に刷りこまれている私には、いかにも危険に思えた。

「…気の毒に」、と同時に「イエス様がここでめし食ってる」という幻を得た。スラムは罪人や徴税人のように忌み嫌われているが、清潔に暮らす人間がつくりだした格差社会の結果ではないのか。

会食は危険なのに、嬉しそう飲み食いしているイエス様。スラムでブラジルの臓物料理を食うイエスに、私たちは何を見るだろうか。

「すると主は、[わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ]と言われた(IIコリント 12:9a)」。

持病の治癒を祈ったこと(12:7~8)への神からの答えを受け、パウロは「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう(12:9b)」と表明する。

「誇る」という言葉には含みがありそうだが、何か別の語彙があるわけではない。人間にとってマイナスである「弱さ」を誇ろうという鋭角が、「強さ」を誇る世の常識を突き破る。

パウロは自らの神秘体験を三人称で語り始める(12:2)。相当な不可思議であったが(12:4)、過剰に解釈したりせず、「神がご存じだ(12:2~3)」とそっけない。体験そのものは誇らしいが、それを売り物にすることはなく、「弱さ以外に誇るつもりはない(12:5)」と公言している。

昔も今も、見栄の張り合い(強さを誇る)は日常的にあるが、パウロは信仰体験が手柄話にならぬよう注意深く語っている。

パウロの祈りに応えて神が「わたしの恵みは十分、力は弱さの中でこそ十分に発揮される(12:9)」と語ったことと、御子イエスが罪人や徴税人とめし食っていることが重なるのではないか。

格差社会をつくりだす「強さを誇る」姿勢の内に、弱さの中で発揮される福音を見つけることはない。コロナ恐怖に煽られて、私たちの視線がファリサイ的(マルコ 2:16)な「自粛警察」に傾かぬよう気をつけたい。

スラムという三密は格差社会が抱えた弱さだが、個々の弱さは格差なく一人ひとりが抱えている。「思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられた(IIコリント 12:7)」。

これは「恵みは十分、力は弱さの中で~(12:9)」という神の言葉を受け取っているがゆえの自戒。「とげ(持病)」は「サタンの使い(12:7)」、治癒を「三度願った(12:8)」と語るほどに相当苦しいものだったろう。

不安や苦しみの中にある私たちに、神は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される(12:9)」と応えて下さる。恵みと力が発揮される場は私自身の弱さでだが、それはまた十字架につけられた神の弱さでもある。「キリストの力(弱さ)がわたしの内に宿る(12:9)」。弱さ、つまり「十字架の言葉は減んでいく者には愚かだが、救われる者には神の力なのだ(Iコリント 1:18)」。



#### 《おまけのひとこと》

眠っている者は 知恵を誇り 力を誇り 富を誇る 目覚めている者は 主を誇る(エレミヤ 9:22~23)  
眠りにしがみつ়く者は多いが 明日には目覚めたいという 非難されても今日の内に叩き起こすか